

機関番号	研究種目番号	審査区分番号	細目番号	分割番号	整理番号
64302	04	1	2851		0001

平成22年度(2010年度)基盤研究(A)(一般)研究計画調書

平成21年11月9日

2版

新規

研究種目	基盤研究(A)	審査区分	一般				
分野	人文学						
分科	芸術学						
細目	芸術学・芸術史・芸術一般						
細目表 キーワード	芸術・文化政策						
細目表以外の キーワード							
研究代表者 氏名	(フリガナ)	イナガ シゲミ					
	(漢字等)	稲賀 繁美					
所属研究機関	国際日本文化研究センター						
部局	研究部						
職	教授						
研究課題名	「東洋」的価値観の許容臨界：「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶						
研究経費 (千円未満の 端数は切り 捨てる)	年度	研究経費 (千円)	使用内訳(千円)				
			設備備品費	消耗品費	旅費	謝金等	その他
	平成22年度	21,871	6,231	600	13,400	640	1,000
	平成23年度	15,020	4,880	600	8,400	640	500
	平成24年度	8,440	0	600	6,200	640	1,000
	平成25年度	0	0	0	0	0	0
	平成26年度	0	0	0	0	0	0
総計	45,331	11,111	1,800	28,000	1,920	2,500	
開示希望の有無	審査結果の開示を希望する						
研究計画最終年度前年度応募	--						

研究組織（研究代表者、研究分担者及び連携研究者）

	氏名（年齢）	所属研究機関 部局 職	現在の専門 学位 役割分担	平成22年度 研究経費 （千円）	エフ オ ー ト （%）
研究代表者	40203195 (53) イナガ シゲミ 稲賀 繁美	(64302) 国際日本文化研究センター (913) 研究部 (20) 教授	20世紀モダニズムの世界的展開 文学博士 総括・第2班統括	14,671	30
研究分担者	80273514 (42) タキイ カズヒロ 瀧井 一博	(64302) 国際日本文化研究センター (913) 研究部 (27) 准教授	近現代の日本国制の比較史的研究 博士（法学） 第5班統括	720	15
研究分担者	70310779 (56) フィスター パトリシア Fister Patricia	(64302) 国際日本文化研究センター (913) 研究部 (20) 教授	尼門跡の文化と美術 博士 第4班統括	720	15
研究分担者	10316234 (53) テレングト アイト ル テレングト アイト ル	(30107) 北海学園大学 (207) 人文学部 (20) 教授	比較文学・東西詩学の起源の比較 学術博士 第5班幹事	720	15
研究分担者	50324728 (43) フジハラ サダオ 藤原 貞朗	(12101) 茨城大学 (207) 人文学部 (27) 准教授	美術史編纂史・考古学史の研究 文学修士 第3班統括	720	15
研究分担者	00268476 (44) ナカムラ カズエ 中村 和恵	(32682) 明治大学 (306) 法学部 (27) 准教授	比較文学 修士 第6班統括	720	15
研究分担者	50410519 (40) サノ マユコ 佐野 真由子	(33806) 静岡文化芸術大学 (215) 人文・社会学部 (27) 准教授	幕末期外交文化史・文化政策の倫理 修士（国際関係論） 第4班幹事	720	15
研究分担者	30340524 (44) ハヤシ ヨウコ 林 洋子	(34319) 京都造形芸術大学 (702) 芸術学部 (27) 准教授	美術史、美術評論 博士 第1班統括	720	15
研究分担者	00401521 (37) セン ギョウバイ 戦 暁梅	(12608) 東京工業大学 (875) 学内共同利用施設等 (27) 准教授	日中近代美術交流史 学術博士 第3班幹事	720	15
研究分担者	70329978 (41) リ ケンジ 李 建志	(25406) 県立広島大学 (218) 人間文化学部 (27) 准教授	朝鮮文学朝鮮文化 修士 第1班幹事	720	15
合計 一名				研究経費合計	-

研究目的

本欄には、研究の全体構想及びその中で本研究の具体的な目的について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、適宜文献を引用しつつ記述し、特に次の点については、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。(記述に当たっては、「科学研究費補助金(基盤研究等)における審査及び評価に関する規程」(公募要領56頁参照)を参考にしてください。)

- ① 研究の学術的背景(本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ、応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯、これまでの研究成果を発展させる場合にはその内容等)
- ② 研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか
- ③ 当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

研究目的(概要) ※ 当該研究計画の目的について、簡潔にまとめて記述してください。

19世紀後半以降、とりわけ、第一次世界大戦を経験した西洋世界には、自らの行き詰まりを克服するための可能性を「東洋」に求める一群の思索が登場する。一方、同時代には「東洋」の側から自らの「非西洋」的な異質性を自覚し、西洋を凌駕する「東洋」観を確立しようとする学術/藝術も現れる。本研究は、この両者の交差した地点に浮上した「東洋」像に注目する。思想と造形とをめぐると具体的な論争や衝突を吟味しつつ、国際的同質化への要請と文化的異質性への容認との不確定な許容範囲に聞きあう、葛藤と妥協とを司る機構を解明することが目的となる。

①研究の学術的背景

エドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』(1978)は、「東洋」とは西洋世界が自らの利害関心に沿って捏造した虚像であるとして、その政治性を糾弾した。中近東アラブ圏を主要な対象とするサイードの著作はその後30年近く、学術における西洋中心主義を脱却するうえで、北米を中心に大きな役割を果たしてきた。だが現時点では、サイードの提唱したオリエンタリズム批判そのものが、北米人文学術界の支配的な理念となり、それ自体が西欧アカデミズムに組み込まれ、あらたな学術的基準として世界を席捲する状況を生んでいる。ここには、非西洋世界を西洋世界による抑圧の被害者として規定し、その怨恨を煽ることで、かえって東西あるいは西欧と非西欧の対立を図式的に固定化する欠点が露呈している。

研究代表者は『岩波イスラーム事典』に「エドワード・W・サイード」の項目執筆を依頼され、また『イスラームを学ぶ人たち』への依頼寄稿にあっても『オリエンタリズム』の構想に含まれる問題点への批判に先鞭をつけた。またウンベルト・エーコを中心とする欧州共同体・国際学術組織Transcultura(1988年発足)の創設会員として、思想的な側面並びに造形芸術分野においても、西欧世界とアジア・アフリカを含む非西欧世界との価値観相克の克服をめざす多くの国際会議で提言を続けてきた。1998年には国際日本文化研究センターにおいてCrossing Cultural Borders, Beyond Reciprocal Anthropologyを開催し、その報告書でも、価値観の対峙を土俵に乗せるような学術論争の偽りの対話原理の政治性に疑問を呈してきた。これらの提言は国連大学United Nations Universityが2001年に組織した国際会議ほかにおいて、活発な議論を招いている。

さらに造形芸術に関する分野でも、研究代表者は、「東洋」という概念規定の恣意性が抑圧され、学術規範と混同されている現実を一貫して批判してきた。その発端は1986年にパリのポンピドー・センターで開催された『日本の前衛』展へ理論的批判にあり、近年は2008年ロンドンの大英博物館「日本の伝統工芸」展をめぐる公開討論会への招聘に至る。博物館、美術館のような行政組織、美術史・美学・藝術学を含む東洋学という学術上の枠組みの設定、さらにはそれらの学問分野における対象領域の限定という3つの次元に渡って、西欧社会で成立した制度的・理論的な枠組みによって世界が分別され、考察の対象に整序されている。だが、多くの「文明間の対話」や「国際学術交流」は、自らがこうした歴史的・政治的な足枷に囚われていることに無自覚なまま、かえってその反復的再生産と補強に努めている。

研究代表者は、国際日本文化研究センターにおいて共同研究会「日本の伝統工芸再考」(2003-2006)の組織を許され、その一環としての国際会議を含め、従来の西洋側の定義による「美術」研究や「伝統」観の偏向に対する批判的認識を国際的に覚醒させることを意図してきた。これらの主張はJames Elkins(ed.) *Is Art History Global?*(Routledge, 2007)で展開して反響を呼び、英

研究機関名 | 国際日本文化研究センター

研究代表者氏名 | 稲賀繁美

研究目的（つづき）

圏・フランス語圏にまたがる複数の講演を依頼されている。さらに「アジア」あるいは「東洋」の自己主張の孕む危険については国際比較文学会の国際理事として、複数の国際学会での学術発表で指摘し、異なる価値観が衝突する局面、文化接触がその臨界で呈する現象を解明する「文化接触の気象学 Climatology」を提唱している。

現在、この構想にそって、問題意識を共有する内外の研究者を、専門分野を横断して糾合し、国際日本文化研究センターにおいて共同研究会「『東洋美学・東洋的思惟』を問う：自己認識の危機と将来への課題」（2008- 2010）を主催している。だが共同研究会では研究会の参加旅費が支給されるのみであり、必要とされる現地調査・体系的な文献蒐集と分析とに要する研究費・設備備品費は提供されていない。また、日本における国際研究集会の実施、海外における現地研究者を交えた研究会組織のための費用も、本科学研究費補助金による助成を必要とする。

②研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

以下の6件の互いに密接に関連する課題を設定し、分科会形式の調査研究により解明する。

- (1) 西洋の衝撃に対して「東洋」から発言した知識人・芸術家の思想・行動分析：
従来の国別の分析を乗り越え、東アジア・東南アジア・インド・イスラームを横断する。
- (2) 「東洋からの教訓」を汲んだ西洋の知識人・芸術家の思想と行動の歴史・類型分類：
第1次大戦、第2次大戦などの時代状況との関数において主要な論争を位置づける。
- (3) 美術史、考古学、哲学、思想史などの学術分野における「東洋」の位置づけ：
東洋学の編成過程を西洋のみならず、東洋各地の学術制度の整備において把握する。
- (4) 万国博覧会、国際展覧会などにおける「東洋」規定をめぐる混乱と論争の総括：
従来の19世紀中心の研究を越え、20世紀前半の植民地博覧会を視野に収める。
- (5) 近代制度確立における「東西対立」と思想・造形における価値観の相克の分析：
美学、哲学だけではなく、経済思想、政治思想、法思想における知見と比較する。
- (6) 「東洋対西洋」の対比図式に孕まれたジェンダー的偏差の比較文化・方法論的検討：
帝国主義体制における支配側女性・被支配側女性の立場の相克の実相に輪郭を与える。

③当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点および予想される結果と意義

本研究の学術的な特色は、19世紀後半以降の「東洋」を、西側世界の利害関心と、「東洋」側の自己認識との衝突、葛藤の狭間に形成された「制度および実質」と見なす立場にある。

「東洋」とは、西欧と非西欧世界の価値観が衝突する臨界が描く「表象」のひとつであり、そこで発生した混淆と妥協とが描いた「姿」である。いかなる「東洋」的価値観は歓迎され、許容され、いかなる臨界を越えた「東洋」の異質性は拒絶されたのか。従来未検討のままだったこの機構(力学的・化学的メカニズム)を、思想史や倫理学、美学・美術史を跨いで総合的、領域横断的に、国際的な利害対立を双方向より視野に納めて解明しようとする構想に、本研究の独創性が存する。

ここから**予想される結果**あるいは**成果**は、以下の3点に要約される。

- (1) 西洋世界の「他者」たる「東洋」の許容臨界を、具体的な論争や対立を手がかりに測定することは、「国際社会」の暗黙・無自覚な「掟 rules」を批判的に炙り出すことに繋がる。支配的論理への追従でもなく、唯我独尊の傲慢でもない、第3の立脚点を理論的に提案したい。
- (2) 許容と拒絶の狭間に析出する「東洋」の葛藤の軌跡を思想史・造形史を通じて多角的に精査し、その達成と挫折とを総合的に吟味することにより、国際的文化交渉の場で西洋的価値観と非西洋的価値観との対立を克服する、方法論的な処方箋を見出す糸口を得たい。
- (3) グローバル化が謳われる21世紀社会において、従来の西洋基準の学術的方法や理論を非西洋社会の現象に一方的に適用する横暴への反省が求められている。西欧的価値観の擁護か、それへの敵対かの二律背反と膠着を越え、国際的な知的交流の場の再設定が不可欠である。そのためには、異質性への寛容と同質性への要請との乖離をいかに調停すべきかを問う必要がある。その実践的な英知を集約する教訓が、20世紀の「東洋」像の屈曲のうちに未開発のまま秘められている。かかる知的遺産を発掘し、その教訓を再生するような成果の公表に結び付けたい。

研究計画・方法

本欄には、研究目的を達成するための具体的な研究計画・方法について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、平成22年度の計画と平成23年度以降の計画に分けて、適宜文献を引用しつつ、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。ここでは、研究が当初計画どおりに進まない時の対応など、多方面からの検討状況について述べるとともに、研究計画を遂行するための研究体制について、研究分担者とともに行う研究計画である場合は、研究代表者、研究分担者の具体的な役割（図表を用いる等）、学術的観点からの研究組織の必要性・妥当性及び研究目的との関連性についても述べてください。

また、研究体制の全体像を明らかにするため、連携研究者及び研究協力者（海外共同研究者、科学研究費への応募資格を有しない企業の研究者、大学院生等（氏名、員数を記入することも可））の役割についても必要に応じて記述してください。

研究計画・方法（概要） ※ 研究目的を達成するための研究計画・方法について、簡潔にまとめて記述してください。

本研究は、「研究目的」にあげた6項目の課題にそって、研究分担者に総括責任者を依頼し、そこに各分野から選出した適切な研究協力者を配し、分科会形式でおのおのの課題に答えようとするものである。各々の課題で必要とする文献蒐集には海外調査を含むものとし、分析の成果をもちより、討議のうえ学術的成果へと精錬し、論文集として刊行する。その傍ら、研究の中間的成果を、関連する国際学会で発表・発信するための機会を提供する。海外での出版に耐えうる水準の成果報告を提供することを目標とする（ただしこれには国際的な学術出版状況が、現在の不況を脱出する必要がある）。なお「研究協力者」は国際日本文化研究センターにおける共同研究会のメンバーとして研究発表を行っており、すでに学術実績において確たる評価を得ている研究者である。

（1）研究体制：分科会の構成（研究組織と役割分担）

① 西洋の衝撃に対して「東洋」から発言した知識人・芸術家の思想・行動分析

統括責任：林洋子・李建志《西欧の衝撃への「東洋」の反応》の第一世代として、辜鴻銘、孫文、岡倉覚三、ロビンドロナート・タゴールなど、欧文で著作を刊行した知識人の行動と思想を総合的に再検討する。同時に「東洋人」としての自覚をもって西洋世界で活躍した芸術家たちの軌跡とその時代的な蹉跌も掘り起こし、「東洋」の知的地政学のなかにあらためて位置づけ、従来の評価を刷新する。たしかに従来も、個々の人物に関する独立した研究はなされてきたが、「東洋」の西欧への反応という視点から、中韓日さらにインド、ヴェトナム、タイ、モンゴル等に及ぶ、国籍を越えた比較考量を意図する枠組みは提案されていない。また個々人の思想研究は存在したが、その著作が具体的にどのような反応を引き起こしたか、美術行政を含む物質文化・精神文化への寄与と功罪、母語圏と記述言語圏での受容の落差、といった観点はなお未開拓であり、共同事業による情報集約・比較によって、その全容を明らかにする。◎研究協力者：平川祐弘、木下長宏、劉岸偉、劉香織、範麗雅、大嶋仁、ミッシェル・ダリシエ ◎招聘予定者：ミケーレ・マーラ、太田雄三、ロストム・バルーチャ

② 「東洋からの教訓」を汲んだ西洋の知識人・芸術家の思想と行動の歴史・類型分類

統括責任：稲賀繁美・橋本順光《東洋からの教訓》を汲んだ西欧側知識人の思想と行動を、領域・国籍を横断して解明したい。具体的には、東洋の倫理を説いたラフカディオ・ハーンらを嚆矢として、第一次大戦後に「西洋の危機」を訴えたポール・ヴァレリー、東洋美術史を世界美術史に組み込もうとしたアンリ・フォション、インドへと開眼したヘルマン・ヘッセ、東洋への旅から教訓を汲んだルドルフ・パンヴィッツ、キリスト教徒として仏教を攻撃したアルベルト・シュヴァイツァー、さらに東洋の脅威を訴えて、アジアに理解を示す西洋知識人たちを糾弾したアンリ・マシスにいたるまでの振幅を検討し、「東洋」の誘惑と脅威という、相反する反応の背景と発現の機構を解明する。フェノロサ、アンダーソン、ワグネル、ベルツらのお雇い外国人からはじまり、戦中期のカール・レーヴィット、ブルーノ・タウト、オイゲン・ヘリゲル、ディートリッヒ・ゼッケルなどに至る「東洋」で教鞭をとった知識人の東西観と、通訳となった学生たちとの情報交換における偏差も無視できない。とりわけイスラーム圏を含む「東洋」の評価をめぐる論争を整理し、政治学的決定を背後から支えた国際的思想状況を総括する。◎研究協力者：芳賀徹、大橋良介、プラダ・ヴィセンテ、鶴飼敦子、檜垣樹理、山田奨治、マルクス・リュッターマン ◎招聘予定者：マンフレッド・シュパイデル、リチャード・ジャッフェ、ミンナ・トーマ、キム・ブラント

研究機関名 | 国際日本文化研究センター

研究代表者氏名 | 稲賀繁美

研究計画・方法（つづき）

③ 美術史、考古学、哲学、思想史などの学術分野における「東洋」の位置づけ

統括責任：藤原貞朗・戦暁梅 美術史学、考古学、哲学、倫理学など「東洋」をめぐる学術の制度的確立と、そこに発生した価値観の相克、欧米研究者と東洋の研究者との交渉の軌跡を、国際比較と具体的な人物交流を視野におさめて把握する。とりわけ従来、日本、中国、韓国を横断する学術制度設計の比較、相互影響と競合の様子には、十分な復元がなされてこなかった。また中国の金石学と西欧の考古学との接続・乖離、そこに孕まれた価値観の衝突なども、個々の学問分野内部では、たんなる新旧交代として片付けられる場合が多かった。西洋留学から箔をつけて故郷に凱旋した学者が、留学先では一介の情報提供者として遇された場合もある。瀧精一、大村西崖、濱田耕作、梅原末治、矢代幸雄から島田修二郎ら、海外にも影響力を及ぼした日本人学者だけでなく、中国で五四運動に関わった陳師曾、鄭昶、潘天寿、傅抱石、中国藝術史学会(1937)の発足に尽力した滕固、朝鮮の高裕燮、朴鐘鴻らを含む「東洋学」の系譜とその特色並びに限界を、国際的な知的力学の函数において解明する。

◎研究協力者：礪波護、小田部胤久、西原大輔、西楨偉、衣笠正晃、オリヴィエ・クリシャー、古田島洋介、劉建輝、磯前順一、ミュリエル・ラディック ◎招聘予定者：巖安生、関周植、ペイ・ヒュンイル、リディア・リュウ、アリス・フォルカー、ジャゾン・クオ、ペッカ・コルホネン、クリスチーナ・グライナー、バート・ウィンター＝タマキ、アントン・セヴィツァ

④ 万国博覧会、国際展覧会などにおける「東洋」規定をめぐる混乱と論争の総括

統括責任：佐野真由子・パトリシア・フィスター 文化事業において露呈した「東洋」像の認識錯誤や混乱を抽出し、そこに発生した力学的・化学的変性作用を解明する。19世紀後半の万国博覧会を始めとし、1910年の日英博覧会、1930年代のローマやベルリンの東洋展覧会、1936-7年のロンドンとニューヨークにおける中国故宫美術展などでは、展示品の価値評価、仏像を美術品と見なすか否かの価値基準等において、様々な葛藤や衝突が発生した。敗戦後の講和条約締結記念の展覧会の展示戦略に関しても、日中韓の状況比較すら学術的には手付かずのままである。また戦時中の満洲国や東南アジアの日本文化会館の運営、国際文化振興会の「文化工作」から敗戦後の国際交流基金の運営方針に至るまで、学術的な総括が求められている。◎研究協力者：島本浣、安松みゆき、伊藤奈保子、松原知生、今井祐子、河田明久、吉本弥生、千葉慶、鈴木禎宏、平野共余子、細川周平、李偉 ◎招聘予定者：ジェニファー・ワイゼンフェルド、アイダ・ユエン・ウォン、菊池裕子、王正華、金淑栄、富井玲子

⑤ 近代制度確立における「東西対立」と思想・造形における価値観の相克の分析

統括責任：瀧井一博・テレングト・アイトル 近代国家の制度的確立過程で発生した価値観の「東西対立」も看過できない。西洋学術と儒教的伝統との得失は、文久年間にオランダに派遣された西周と津田真道との意見の相違にはじまり、大日本帝国憲法のみならず、孫文や吉野作造の政体論、穂積陳重の民法に関する学説にも翳を落とし、倫理観における「東洋」観の系譜を形作る。

「東洋」の優位を言い立てる言説は、両大戦期には野口米次郎、鈴木大拙、柳宗悦、和辻哲郎、橋本閑雪、鼓常良、保田與十郎などの著述家にあって、多様に変奏された。しかし従来こうした問題意識は、日本内部で孤立して批判される傾向が支配的であった。同時代中国の蔡元培、梁啓超、林語堂、周作人、あるいはインドのアナンダ・クーマラスワミー、カリダス・ナゲーをはじめとした知識人の思索や行動と並列し比較することで初めて、「東洋」における「東洋」像の孕む問題と可能性を総合的に明らかにできよう。こうした観点は、敗戦後の極東軍事裁判における倫理問題、民法改正の思想的背景の再検討にも有効である。◎研究協力者：佐々木健一、金田晋、朴美貞、陸偉栄、中島岳史、鈴木貞美、牛村圭 ◎招聘予定者：孫歌、フェリックス・カプトウ、スザンナ・フォルマレク

研究計画・方法（つづき）

⑥「東洋対西洋」の対比図式に孕まれたジェンダー的偏差の比較文化・方法論的検討

統括責任：中村和恵《東洋対西洋》の図式は、しばしば西洋側支配者を《男性》に、東洋側の被支配者を《女性》とみる図式を誘発してきた。だがこの図式は「東洋」内部での支配と被支配という入れ子構造を隠蔽する隠れ蓑に悪用される場合もあった。また英国支配の植民地インドにおけるシスター・ニヴェディタからミラ・アルファーサにいたる系譜からもわかるように、欧米の白人女性がアジアの社会変革に関与していたという係数が見落とされてきた。岡倉覚三や野口米次郎の東洋観は「母なるインド」を見落としては理解不能であり、実際、「東洋」における女性の地位に関する議論は、「東洋学」の政治性と無縁でない。また辜鴻銘や周作人が日本婦人を、新渡戸稲造が米国婦人を娶った事実が含む社会学的意味なども、当時の国際的な知的環境のもとで、「東洋」をジェンダーの視点から解明するため糸口となろう。片倉もとこ『イスラームの日常生活』、井波律子『中国烈女伝』の着眼を拡大し、これら先行研究の合間の時代に着目し「東洋」における《女性》の役割を解明したい。

◎研究協力者：濱下昌宏、金恵信、村井則子、堀まどか ◎招聘予定者：グーハ・タクルタ

(2) 各年度の研究計画

平成22年度 8月にはソウルで開催予定の「国際比較文学会」(ICLA)において、研究代表者が、野口米次郎をめぐるシンポジウムを組織する。研究協力者を中心に派遣・発表を予定する。秋には国際日本文化研究センターにおいて、国際研究集会を予定する。(招聘予定者は上述①－⑥のとおり)。このための海外からの研究者派遣費用を本科学研究費によって負担する。そのほか、研究分担者、研究協力者による海外調査・資料収集を補助金により遂行する。図書関係の資料は、研究分担者による勤務先図書館などへ収集するのほか、研究協力者による図書推薦は、国際日本文化研究センター図書館に納品し、本研究のみならず将来にわたって、広く研究者の利用に供する体制を整える。また関連部会を Association of Asian Studies (AAS) においてワークショップを立ち上げる(ただし、これは第一位の候補であり、発表申請が受理されることが条件となる。却下された場合には、次善の機会を捉え、別途の研究会に切り替える予定とする)。

平成23年度以降の計画

ひきつづき、図書その他の資料収集、海外を含む資料調査を続行する。本課題の成果の一部を発信するに相応しい国際学会などの計画が判明した場合には、研究分担者、研究協力者を積極的に派遣し、成果の発信に努める。と同時に、研究成果報告書の取り纏めに入る。

本研究の場合、成果報告書の出版をもって目的を達したものとはならない。むしろそれを立脚点、出発点としてさらに海外に問題意識を伝達し、共有を図ることに目的がある。海外で関心を共有できる人材を研究協力者として取り込みつつ、平成23年度には、本研究の目的に沿った海外における研究集会組織を視野におさめ、計画立案に努め、24年度に報告書出版を目指す。

国際研究機関 Transcultura (欧州共同体)、国際日本美術史研究会 (AAS に付属)、欧州日本研究会 (EAJS)、アルザス日本研究所 (CEJA)、国際比較文学会 (ICLA) などが、会場提供・共催候補者として想定できる。研究代表者はこれらの学会においていずれも招聘あるいは発表経験があり、関連機関とは密接な学術的関係 (学術委員、国際理事など) を保っている。

研究機関名 | 国際日本文化研究センター

研究代表者氏名 | 稲賀繁美

今回の研究計画を実施するに当たっての準備状況等

本欄には、次の点について、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。

- ① 本研究を実施するために使用する研究施設・設備・研究資料等、現在の研究環境の状況
- ② 研究分担者がいる場合には、その者との連絡調整の状況など、研究着手に向けての状況（連携研究者及び研究協力者がいる場合についても必要に応じて記述してください。）
- ③ 本研究の研究成果を社会・国民に発信する方法等

①国内の研究施設としては、会合などの便宜には、極力、大学共同利用機関 人間文化研究機構国際日本文化研究センターを活用する。図書を集積も原則として同図書館において行う。

②研究分担者には、国際日本文化研究センターにおける共同研究会「東洋美学、東洋的思惟を問う」（平成20-22年）の最終年度コアメンバーを中心にお願いする。すでに全員より承諾を得ており、日常的に密接な学術的情報のやりとりがある。研究協力者についても、同研究会のそれ以外のメンバーに依頼し、了承をとりつけている。共同研究会では、規定により調査費、図書・資料購入費などは支給対象外であるため、この部分を科学研究費助成金によって補い、共同研究会の延長で計画を実現する。

③研究報告書の刊行とともに、国際研究集会の実施により、成果を内外に発信する。またインターネットなどを活用して、広く一般国民・社会にアクセス可能な形態で、成果の広報に努める。さらに海外に研究協力者を求め、今後の知的ネットワーク形成を図る。

なお、海外からの招聘予定者は、現時点で全員、研究代表者と個人的に接触・交友がある。いずれも国際的な評価の高い現役・中堅・若手の研究者を国籍・分野に偏らず選定した。

研究計画最終年度前年度の応募を行う場合の記入事項（該当者は必ず記入してください（公募要領16頁参照））

本欄には、研究代表者として行っている平成22年度が最終年度に当たる継続研究課題の当初研究計画、その研究によって得られた新たな知見等の研究成果を記述するとともに、当該研究の進展を踏まえ、今回再構築して本研究を応募する理由（研究の展開状況、経費の必要性等）を記述してください。（なお、本欄に記述する継続研究課題の研究成果等は、基盤A・B（一般）-10の「これまでに受けた研究費とその成果等」欄には記述しないでください。）

研究種目名	審査区分	課題番号	研究課題名	研究期間
				平成 年度～ 平成22年度

当初研究計画及び研究成果等

応募する理由

研究業績

本欄には、研究代表者及び・研究分担者が最近5か年間に発表した論文、著書、産業財産権、招待講演のうち、本研究に関連する重要なものを選定し、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり、発表年（暦年）毎に線を引いて区別（線は移動可）し、通し番号を付して記入してください。なお、学術誌へ投稿中の論文を記入する場合は、掲載が決定しているものに限ります。
 また、必要に応じて、連携研究者の研究業績についても記入することができます。記入する場合には、二重線を引いて区別（二重線は移動可）し、研究者毎に、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり記入してください（発表年毎に線を引く必要はありません。）。

発表年	研究代表者・分担者氏名	発表論文名・著書名 等 （例えば発表論文の場合、論文名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。） （以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。著者名が多数にわたる場合は、 <u>主な著者を数名記入し以下を省略（省略する場合、その員数と、掲載されている順番を○番目と記入しても可。なお、研究代表者には二重下線、研究分担者には一重下線、連携研究者には点線の下線を付してください。）</u>
2009 以降	稲賀繁美 瀧井一博 パトリシア・フィスター 佐野真由子 林洋子 戦暁梅 橋本順光	1. <u>Shigemi Inaga</u> , “The Interaction of Bengali and Japanese Artistic Milieus in the First Half of the Twentieth Century (1901-1945): Rabindranath Tagore, Arai Kanpō and Nandalal Bose,” <i>Japan Review</i> No. 21, International Research Center for Japanese Studies, 2009, pp.149-181. 【査読有】 2. 瀧井一博「知の嚮導としての韓国統治」伊藤之雄・李盛煥『伊藤博文と韓国統治』（ミネルヴァ書房、2009年）、193-217頁。 3. パトリシア・フィスター編著『尼門跡寺院の世界—皇女たちの信仰と御所文化』産経新聞社、2009年4月。[総384頁] 4. 佐野真由子「幕臣筒井政憲における徳川の外交——米国総領事出府問題への対応を中心に」『日本研究』第39集（2009年）、29-64頁。【査読有】 5. 林洋子「パリ・東京・仏領インドシナ：親仏派日本人美術家の系譜」『GENESIS』（京都造形芸術大学紀要）13号、2009年10月。【査読有】 6. 口頭発表 戦暁梅「民藝運動と「満洲」：「満洲民藝調査報告展覧会」を手がかりに」国際シンポジウム『東北アジア文化史の再構築』第一部（長春）2009年9月9日。 7. 橋本順光「ラフカディオ・ハーンの時事批評と黄禍論」、橋本順光、平川祐弘編著『講座小泉八雲 II ハーンの文学空間』新曜社（2009年）541-557頁。
2008	稲賀繁美 稲賀繁美 稲賀繁美 稲賀繁美 稲賀繁美	8. 樋田豊郎・稲賀繁美編『終わりきれない「近代」八木一夫とオブジェ焼』美学出版 2008年4月10日。[総285頁] 9. <u>Shigemi Inaga</u> , «Yagi Kazuo entre tradition japonaise et avant-garde occidentale : ou la fissure entre poterie et sculpture », <i>La Rencontre du Japon et de l'Europe, Image d'une découverte</i> , Actes du troisième colloque d'études japonaises de l'Université Marc Bloch, Publications Orientalistes de France, (le 18 avril, 2007), 2008, pp.134 -146. 【査読有】 10. <u>Shigemi Inaga</u> , “Japanese Encounters with Latin America and Iberian Catholicism (1549-1973): Some Thoughts on Language, Imperialism, Identity Formation, and Comparative Research,” Dorothy Figueira ed., <i>The Comparatist</i> , May, 2008, pp.27-35. 【査読有】 11. 稲賀繁美「いま、＜世界文学＞は可能か？：＜全球化＞のなかで 21世紀の比較文学の現在を問う」『比較文学研究』92号 104-121頁 2008年11月30日。【査読有】 12. <u>Shigemi Inaga</u> , (ed.) <i>Books on Ukiyoe and Japanese Arts in English by Yone Noguchi</i> , Volume 1, Hiroshige (1921), Hiroshige and Japanese Landscapes (1934), Korin (1922), Utamaro (1925), Hokusai (1925), Edition Synapse, 2008. [ca.296 pp.] ---Volume 2, Harunobu (1927), Kiyonaga (1932), Shiraku (1932), Edition Synapse, 2008. [ca. 318 pp]
研究機関名 国際日本文化研究センター		研究代表者氏名 稲賀 繁美

研究業績（つづき）	
2008	<p>瀧井一博 中村和恵 藤原貞朗 林洋子 戦暁梅 李建志</p> <p>---Volume 3, <i>The Ukiyoe Primitives</i> (1933), Emperor Shoumu and the Shosoin (1941), Edition Synapse. [ca.420 pp.] 13. <u>Kazuhiro Takii</u>, “Lorenz von Steins vergleichende Rechtswissenschaft. Von der europäischen Rechtsgeschichte zum Weltsystem des Rechts“, in: Gerald Kohl, Christian Neschwara u. Thomas Simon (ed.), <i>Festschrift für Wilhelm Brauneder zum 65. Geburtstag, Rechtsgeschichte mit internationaler Perspektive</i>, Wien: Manz, 2008, pp. 687-698. 14. 中村和恵「微笑ノート」——横光利一と『少年ケニヤ』の時代 『比較文學研究』92, 2008年11月, 18-31頁。【査読有】 15. 藤原貞朗『オリエンタリストの憂鬱—植民地主義時代のアンコール遺跡の考古学とフランスの東洋学者』めこん, 2008年。[総528頁] 16. 林洋子『藤田嗣治 作品をひらく』名古屋大学出版会, 2008年4月。[総589頁] 17. 戦暁梅 復刻雑誌解説『満洲総合文化雑誌 藝文』第一卷第十一号、第二卷第二号(監修: 呂元明、鈴木貞美、劉建輝) ゆまに書房 2008年1月、2008年7月、解説各1-8、1-7頁。[各巻: 総240頁、総224頁] 18. 李建志 『日韓ナショナリズムの解体—「複数のアイデンティティ」を生きる思想』筑摩書房, 2008年。[総234頁]</p>
2007	<p>稲賀繁美 稲賀繁美 瀧井一博 パトリシア・フィスター テレングト・アイトル 藤原貞朗 李建志</p> <p>19. <u>Shigemi Inaga and Patricia Fister</u> (eds.) <i>Traditional Japanese Arts and Crafts in the 21st Century: Reconsideration the Future from an International Perspective</i>, International Research Center for Japanese Studies, 2007年9月3日発行。[468pp.] 20. 稲賀繁美編著『伝統工芸再考：京のうちそと——過去発掘・現状分析・将来展望 (<i>Traditional Japanese Arts & Crafts A Reconsideration from Inside and Outside Kyoto</i>)』思文閣出版, 2007年7月25日発行。[総865頁] 21. Wilhelm Brauneder / <u>Kazuhiro Takii</u> (ed.), <i>Die österreichischen Einflüsse auf die Modernisierung des japanischen Rechts</i>, Peter Lang (Frankfurt am Main u.a.), 2007. [187pp.] 22. Patricia Fister, “Merofu Kannon and Her Veneration in Zen and Imperial Circles in Seventeenth-Century Japan,” <i>Japanese Journal of Religious Studies</i>, Vol. 34, No. 2, Nanzan Institute for Religion and Culture, 2007, pp. 417-442. 【査読有】 23. Aitoru Terenguto, “Beyond Enemy and Friend? A Multitude of Views of Life and Death Centering on the 'Mongolian Gravestone,’” <i>Inner Asia</i> Vol.9.No.1, Mongolian & Inner Asia Studies Unit, University of Cambridge, pp.77-95 【査読有】 24. 藤原貞朗「パリの万国博覧会とアンコール考古学の近代化」、<i>Art and Culture in East Asia</i>, 第3号、東アジア美術文化学会、韓国ソウル, 2007年、171-216頁。【査読有】 25. 李建志『朝鮮近代文学とナショナリズム—「抵抗のナショナリズム」批判』作品社, 2007年、[総258頁]。</p>
2006	<p>テレングト・アイトル 中村和恵 藤原貞朗</p> <p>26. テレングト・アイトル「一三世紀『蒙古襲来』と『蒙古の碑』——日本の死生観における鎮魂と怨親平等をめぐる」『現代宗教』東京堂出版 2006年6月185-225頁。 27. 中村和恵「異教徒の十字架——非ヨーロッパにおけるキリスト教の同化／異化の例としてのサム、グロンニオサウ、ミッテルホルザー、イヒマエラ、ウェント、プラットそして遠藤周作」『比較文學研究』88, 2006年10月, 4-36頁【査読有】 28. <u>Sadao Fujihara</u>, «Henri Focillon et la pensée asiatique de Tenshin Okakura», <i>Aesthetics</i>, Number 12, 2006, The Japanese Society for Aesthetics, p.37-52. 【査読有】</p>
研究機関名	国際日本文化研究センター
研究代表者氏名	稲賀 繁美

研究業績（つづき）	
2006	<p>佐野真由子 橋本順光</p> <p>29. 佐野真由子「無形文化遺産保護の国際化と東アジア」『東アジアの文化交流と相互理解』高麗大学校日本学研究中心、2006年、49-55頁。 30. Yorimitsu Hashimoto ed., <i>The Yellow Peril: Collection of British Novels 1895-1913</i>, 7 vol. Tokyo: Edition Synapse, 2007. [2,750 pp.]</p>
2005	<p>稲賀繁美 瀧井一博 テレングト・アイトル 中村和恵 藤原貞朗 藤原貞朗 戦暁梅 橋本順光</p> <p>31. 稲賀繁美(海外招待編集者として招聘責任編集)「問題発見のための視覚文化研究を目指して—日本における美術史研究とその隣接領域」; <i>Depiction and Description : Morphology of Modern Visuality and Market Place in Transition : Methodological Reflections</i>, (韓国)『美術史論壇』特集号 第20巻 2005年。[総663頁]</p> <p>32. 瀧井一博 編訳『ローレンツ・フォン・シュタイン講述陸奥宗光筆記 シュタイン国家学ノート』信山社 2005年3月 vi+286+ii頁。</p> <p>33. テレングト・アイトル「怨親平等と戦争とモンゴル——元兵怨霊追善供養碑をめぐる」『東北仏教の世界——社会的機能と複合的性格』(東北仏教の社会的機能と複合的性格に関する調査研究<基盤研究A>:研究成果報告書、課題番号13301002)2005年3月、55-79頁。</p> <p>34. Nakamura Kazue “Suicides and Arsonists: Albert Wendt, Mishima Yukio, Sia Figiel or the Literature of Modern Darkness,” <i>SPAN: Journal of the South Pacific Association for Commonwealth Literature and Language Studies</i>. No.54/55, April & October 2005. pp.44-53. 【査読有】</p> <p>35. 藤原貞朗「東洋美術史學의 형성과정에서의 역사적·문화적 가치관: 분석방법을 둘러싼 일본과 歐美의 競争에 대해서」, 『美術史論壇』第20号, 韓國美術研究所, 2005年, p. 353-379. 【査読有】</p> <p>36. Sadao Fujihara, « Henri Focillon et son étude sur Hokusai », postface de la réédition de <i>Hokusai</i> par Henri Focillon, Fage Édition, Lyon, 2005, pp.163-170.</p> <p>37. 戦暁梅 招待講演「日本近代美術史にみる漢文文化の『隠れ顔』——文人画をめぐる諸現象を中心に」、二松学舎大学21世紀 COE プログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」シンポジウム「漢文学の近代的転回」パネリスト 二松学舎大学、2005年9月10日。</p> <p>38. Yorimitsu Hashimoto, "Japanese Tea Party: Representations of Victorian Paradise and Playground in <i>The Geisha</i> (1896)," in John K. Walton, ed. <i>Histories of Tourism: Representation, Identity and Conflict</i>, Clevedon, U.K.: Channel View, 2005, pp. 104-124.</p>
連携研究者氏名 (所属研究機関・部局・職)	<p>発表論文名・著書名 等 (研究代表者及び研究分担者の研究業績として上欄に記載したものは記載しないでください。)</p>
研究機関名	国際日本文化研究センター
研究代表者氏名	稲賀 繁美

これまでに受けた研究費とその成果等

本欄には、研究代表者及び研究分担者がこれまでに受けた研究費（科学研究費補助金、所属研究機関より措置された研究費、府省・地方公共団体・研究助成法人・民間企業等からの研究費等。なお、現在受けている研究費も含む。）による研究成果等のうち、本研究の立案に生かされているものを選定し、科学研究費補助金とそれ以外の研究費に分けて、次の点に留意し記述してください。

- ① それぞれの研究費毎に、研究種目名（科学研究費補助金以外の研究費については資金制度名）、期間（年度）、研究課題名、研究代表者又は研究分担者の別、研究経費（直接経費）を記入の上、研究成果及び中間・事後評価（当該研究費の配分機関が行うものに限る。）結果を簡潔に記述してください。（平成20年度又は平成21年度の科学研究費補助金の研究進捗評価結果がある場合には、基盤A・B（一般）－11「研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性」欄に記述してください。）
- ② 科学研究費補助金とそれ以外の研究費は線を引いて区別して記述してください。

- ① 研究種目：基盤研究（B）
- ② 期間（年度）平成16～18年度
- ③ 研究課題名：「工芸における伝統と革新：京都を中心とした職人産業の歴史的変遷と現状分析」
- ④ 研究代表者：稲賀繁美（平成16・17年度）、パトリシア・フィスター（平成18年度）
- ⑤ 研究経費

平成16年度	5,100	千円
平成17年度	2,800	千円
平成18年度	3,400	千円
計	11,300	千円
- ⑥ 研究成果：工芸における伝統と革新の問題を、京都における伝統工芸の抱える問題を中心に、各地での実地調査や歴史的資料の解説を通して解明した。

他のメンバー 戦暁梅、林洋子、佐野真由子、パトリシア・フィスター

研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性

- ・本欄には、本応募の研究代表者が、平成20年度又は平成21年度に、「特別推進研究」、「基盤研究（S）」又は「学術創成研究費」の研究代表者として、研究進捗評価を受けた場合に記述してください。
- ・本欄には、研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性（どのような関係にあるのか、研究進捗評価を受けた研究を具体的にどのように発展させるのか等）について記述してください。

研究機関名 | 国際日本文化研究センター

研究代表者氏名 | 稲賀繁美

人権の保護及び法令等の遵守への対応（公募要領3頁参照）

本欄には、研究計画を遂行するにあたって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取り扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など法令等に基づく手続きが必要な研究が含まれている場合に、どのような対策と措置を講じるのか記述してください。

例えば、個人情報を伴うアンケート調査・インタビュー調査、患者から提供を受けた試料の使用、ヒト遺伝子解析研究、組換えDNA実験、動物実験など、研究機関内外の倫理委員会等における承認手続きが必要となる調査・研究・実験などが対象となります。

なお、該当しない場合には、その旨記述してください。

該当しない

研究経費の妥当性・必要性

本欄には、「研究計画・方法」欄で述べた研究規模、研究体制等を踏まえ、次頁以降に記入する研究経費の妥当性・必要性・積算根拠について記述してください。また、研究計画のいずれかの年度において、各費目（設備備品費、旅費、謝金等）が全体の研究経費の90%を超える場合及びその他の費目で、特に大きな割合を占める経費がある場合には、当該経費の必要性（内訳等）を記述してください。

① 研究代表者・研究分担者、計11名に関しては、海外関連学会での発表と資料収集のための旅費(20万円)および図書・資料等購入費(40万円)として、平成22年度、平成23年度については、原則ひとり単年度60万円が必要となる。11名×60万円＝660万円×2年。あわせて研究分担者10名に年3度の国内打ち合わせとして10人×3回×2万円＝各年60万円が必要となる。また6班に分かれた分科会での国内調査費として各班年額10万円を計上する（平成24年度については最終取り纏めのための国内調査費用として計上）。

② 研究協力者47名は、いずれも先端の研究者であるが、研究統括の業務は免除するため、設備購入費は当てず、海外調査及び学会発表のための旅費については、平成22年度－24年度を通じて各年度25名分のみ計上する。関連図書推薦のための費用については、各分科会ごとに応募審査を行い年間8万円を割り当てることとし、競争率を2倍強とすることで対応する。研究協力者への配分には、研究代表者が責任をもつ。

③ 日本での国際研究集会実施費用としては、海外から20名の「招聘予定者」を絞り込み、一人あたり旅費・滞在費込みで25万円として500万円（平成22年度）、海外での国際研究集会実施費用として20名の派遣、一人あたり25万円として、最低限500万円（平成24年度）が必要となる。

④ 資料整理のために2名の雇用が必要となることより、平成22年度－24年度の各年度64万円を計上する。

以上が、本研究計画を遂行するうえで、基礎的に妥当かつ必要な直接経費の内訳となる。大規模な運営となるため、これに規定の事務間接経費を得ることが、運営の基本条件となる。

基盤A・B（一般）－13
(金額単位：千円)

設備備品費の明細		消耗品費の明細		
【記入に当たっては、基盤研究（A・B）（一般）研究計画調書作成・記入要領を参照してください。】		【記入に当たっては、基盤研究（A・B）（一般）研究計画調書作成・記入要領を参照してください。】		
年度	品名・仕様 (数量×単価) (設置機関)	金額	品名	金額
22	【研究代表者執行分】			
	① iMac 24 インチ 245,000 円×2 台	490	① 資料複写費	140
	② 周辺機器 (iMac 用)	54	② USB メモリー	50
	③ レッツノート(パナソニック) CF-W8HCNCPS Letsnote W8 シリーズ 265,000 円×2 台	530	③ 外付けハードディスク	100
	④ 周辺機器(レッツノート用)	53	④ 白黒トナーカートリッジ	70
	⑤ PDF編集ソフト並びに動画編集ソフト Adobe Acrobat 9 (Windows XP SP2 以降, Vista) Pro 57,000 円+ 98,000 円	155	⑤ カラーインクカートリッジ (1 本 4 万円×4色、1本 3 万円×1本(黒))	190
	⑥ プリンター Epson LP-S2100 15,000×1台	15	⑥ OA 用紙	50
	⑦ スキャナー Epson GT-X820 27,000 円×2 台	54		
	(以上、国際日本文化研究センターに設置)			
	書籍			
	①「東洋知識人の世界像」関係書籍	880		
	②「西洋知識人の東洋像」関係書籍	880		
	③「東洋学」の歴史・社会史関係書籍	880		
	④「国際展覧会での東洋」関係書籍	880		
⑤東西価値観の抗争」関係書籍	880			
⑥東西対立とジェンダー」関係書籍	480			
*①－⑥の内訳は以下のとおり。 6 班の研究分担者は各自年額 40 万円： ①②③④⑤班は各 2 名で 80 万円。⑥班は 1 名 40 万円。6 班の研究協力者推薦額、各班ごと 8 万円×6 班=48 万円				
計		6,231	計	600
23	①「東洋知識人の世界像」関係書籍	880	① 資料複写費	140
	②「西洋知識人の東洋像」関係書籍	880	② USB メモリー	50
	③「東洋学」の歴史・社会史関係書籍	880	③ 外付けハードディスク	100
	④「国際展覧会での東洋」関係書籍	880	④ 白黒トナーカートリッジ	70
	⑤東西価値観の抗争」関係書籍	880	⑤ カラーインクカートリッジ (内訳は 22 年度と同様)	190
	⑥東西対立とジェンダー」関係書籍	480	⑥ OA 用紙	50
	*①－⑥の内訳はH22 年度の原則に同じ。			
計		4,880	計	600
24			①資料複写費	140
			②USB メモリー	50
			③外付けハードディスク	100
			④白黒トナーカートリッジ	70
			⑤カラーインクカートリッジ (内訳は 22 年度と同様)	190
			⑥OA 用紙	50
			計	600
研究機関名	国際日本文化研究センター		研究代表者氏名	稲賀繁美

研究費の応募・受入等の状況・エフォート

本欄は、第2段審査（合議審査）において、「研究資金の不合理な重複や過度の集中にならず、研究課題が十分に遂行し得るかどうか」を判断する際に参照するところですので、本人が受け入れ自ら使用する研究費を正しく記載していただく必要があります。本応募課題の研究代表者の応募時点における、(1) 応募中の研究費、(2) 受入予定の研究費、(3) その他の活動、について、次の点に留意し記入してください。なお、複数の研究費を記入する場合は、線を引いて区別して記入してください。具体的な記載方法等については、研究計画調書作成・記入要領を確認してください。

- ① 「エフォート」欄には、年間の全仕事時間を100%とした場合、そのうち当該研究の実施等に必要となる時間の配分率(%)を記入してください。
- ② 「応募中の研究費」欄の先頭には、本応募研究課題を記入してください。
- ③ 競争的資金補助の「競争的資金補助」欄に「競争的資金補助」を記入し、「競争的資金補助」欄に「競争的資金補助」を記入してください。
- ④ 加算研究費の「競争的資金補助」欄に「競争的資金補助」を記入してください。

(1) 応募中の研究費

基金制度・研究費種別・研究期間（配分機関等名）	研究課題名（研究代表者氏名）	役割（代表・分担の別）	平成22年度の研究総費（期間全体の額）(千円)	エフォート(%)	研究内容の相違点及び他の研究費に加えて本応募研究課題に応募する理由
【本応募研究課題】 基盤研究(A)（一般） (H22~H24) (国際日本文化研究センター)	「東洋」的価値観の許容限界:「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶 (研究代表者: 稲賀繁美)	代表	21,871 (45,331)	30	
基盤研究(B)（一般） (H. 22-24) (関西大学)	風土学の観点における<技術>と<自然>の変容過程—日本・東アジア文明圏の近代化 (研究代表者: 木岡伸夫)	分担	500 (1,500)	5	

研究機関名 国際日本文化研究センター

研究代表者氏名 稲賀繁美

研究費の応募・受入等の状況・エフォート（つづき）

（2）受入予定の研究費

資金制度・研究費名・研究期	研究課題名（研究代表者氏	役 割	平成22年度	エ フ	研究内容の相違点及び他の研究費に加
		分担の 別)	(申請金額) (万円)	ト(%)	
基盤研究（C） （一般）（H. 22-24） （京都国立近代美術 館）	東西文化の磁場 - 日 本近代建築・デザイ ン・工芸の脱・超領 域的作用史の基礎研 究（研究代表者：山野 英嗣）	分担	300 (900)	10	
基盤研究（C） （一般）（H. 21-23） （大手前大学）	文久年間日本、言 語・文化交流の総合 的研究：翻訳語彙の 概念史研究を中心 にして（研究代表者： 上垣外憲一	分担	250 (500)	20	
<p>（3）その他の活動</p> <p>【上記の応募中及び受入予定の研究費による研究活動以外の職務として行う 研究活動や教育活動等のエフォートを記入してください。】</p>				35	
<p>合 計</p> <p>（上記（1）、（2）、（3）のエフォートの合計）</p>				100 (%)	